

二〇一六年度

二月一日入試

国語 (50分)

注意

- 1 開始の「チャイム」が鳴るまでは、中を見てはいけません。
- 2 答えはすべて解答题紙の解答らんには、はっきり書きなさい。
- 3 終わりの「チャイム」が鳴ったら、とちゅうでもやめなさい。
- 4 問題のページは、1-1 から 1-13 まであります。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。)

① 人間の営みが絵となる一瞬がある。

※ 白夜の北極海に白いしぶきが上がり、ゆつくりとこちらに近づいてくる。セミクジラが潮を吹きながら北に向かっていた。クジラ漁のキャンプはシーンと静まり返っている。氷原にいるすべてのエスキモーの目が、何も知らずに進んでくる一頭のセミクジラに注がれていた。

一〇〇メートルほど沖に作られたそれぞれのキャンプからは、ウミアック(アゴヒゲアザラシの皮で作ったエスキモーの伝統的なカヌー)がいつでも海に出せるようになっていた。今はただ静かに待つだけだ。

満月である。あたりは淡い白夜の光に包まれていた。海は完全に凧いである。まるで示し合わせたように、一〇数艘のウミアックがいつせいに海へすべり出した。たくさんの影が、光る海の中を音もなく一点に向けて進んでいる。きれいだった。自然という巨大な器の中で動く、小さな人間たちの営みが、たまらなくきれいだっただ。

② 仲間の動きで□に返る。ウミアックは一気に氷上から海に押し出され、気がつくとは僕は六人のエスキモーとともにウミアックを漕いでいた。凄じいテンポでオールが水に突きささり、そのリズムについていくのがやつとだ。仲間のエスキモーに言われたことが頭の中をよぎる。

「いいかミチオ、クジラに向かつて力いっぱい漕げ。水音をたてちゃだめだ。クジラが気づいちまうからな。静かに力いっぱい漕ぐんだ。」

③ クジラを見ている余裕などなかった。かなりのスピードを出しているのに、聞こえるのはオールが水を切る音だけだ。口の中が乾いてきた。もう自分の限界だった。

「だめだ！」
だれかが叫んだ。一斉にオールの動きが止まった。初めて前を見た。黒い巨体は悠々と乱水の彼方に消えようとしている。疲れ果てた僕たちは話す者としてなく、聞こえるのは激しい息づかいだけ。漕ぎ手を失ったウミアックはゆらゆら漂っていた。

④ からだが火照っていた。クジラの残像が消えず、僕はその中で揺れていた。それは表現することのできな不思議な体験だった。ウミアックで追う人間と、同じ生命の延長線上にクジラの生命があった。同じ土俵で、人間とクジラが絡まっていた。

「ミチオ、何か日本の歌をうたえよ。」
突然、前に座っていたエノックが振り向かずに言った。
「なんでもいいから歌えよ。」

⑤ 静かな夕べだった。僕はしばらく考えて海の歌がいいなと思い、われは海の子を歌い出した。歌い始めてすぐに後悔した。なんてこの場にそぐわない歌をうたっているんだらう。おまけに歌詞がわからなくなり、まあいいかと、途中からでたためになっちゃった。それでもみんなは喜んでくれた。

「いい歌だ、元気がある。」
だれかがメロディをまねて歌い出し、大爆笑となった。

一九八二年四月。アラスカ北極圏のエスキモー村、ポイントホープ。クジラ漁の朝は、熱いカリブーのスープで始まる。二週間前、エノックと狩猟に行ったとき仕留めたカリブーが目の前に横たわっている。スープを作るため、凍りついたカリブーの肉を斧で碎かねばならない。キャンプでの僕の仕事は、女たちと

一緒に食事を作ること。飛び散った肉のかけらを口に含むと、ひんやりと冷たく、わずかな甘味が口の中でとろけた。

この時期、ベーリング海から北極海にかけてびっしり張りつめていた氷が少しずつ動き出す。潮流と風の方によって氷に長い亀裂が入り、ところどころに海面が現れるのだ。この海面はリードと呼ばれる。ちょうどその頃、北極セミクジラがベーリング海を通過して北極海に向かっていている。哺乳動物であるクジラは、海面上がって呼吸しなければならぬ。このリードこそ、海面を必要とするクジラにとっての移動ルートになる。

クジラ漁のキャンプはこのリードに沿ってでき上がる。普通、リードは陸地から五キロ〜一〇キロ離れたところに現れる。リードは小さ過ぎても大き過ぎてもクジラ漁には適さない。小さいと、銛をうつことはできて、クジラは死ぬ前に氷の下に逃げ込んでしまう。逆に大きいと、人間が漕ぐウミアックではとても追いきれないのだ。

⑥ この年のリードはずっと不安定だった。キャンプに入っただけで三週間が過ぎ、クジラ漁のシーズンが終わろうとしていた。それはクジラが行ってしまうことではない。六月まで、さらにたくさんのクジラがこの海を通り過ぎるのだ。しかし、その前に対岸の水がなくなってしまい、リードそのものが消滅してしまう。リードがなくなれば、広大な北極海が広がるだけ。そうなれば、ウミアックを漕いでクジラを追うことなど不可能なのだ。自然が作り上げた、リードという氷にかこまれた海があつてこそ、エスキモーのクジラ漁が成り立つ。

⑦ 「もしも一頭のクジラも獲れなかったら」という不安が村人たちの間に漂い始めていた。クジラの肉を食べべられずに一年を過ごさなければならぬとしたら……。それは昔のような飢餓の不安ではない。今は時代が違う。お金さえ払えば、食料は外の世界から入ってくる。けれども何かが違う。変わりゆく暮らしの中でどうしても守らなければならぬもの。自分たちが誰なのかを教え続けてくれるもの。クジラ漁とは、エスキモーの人々にとって、何かそんなもののような気がする。

五月になった。南からシギやチドリを始め、たくさんの渡り鳥が群れをなして飛んできて、さらに北へ向かってゆく。彼らはアラスカ北極圏に営巣をしにやってきたのだ。春の使者、ユキホオジロもあちこちに⑧ 見かけるようになった。頭上から聞こえてくる春の歌。僕は自然の秩序を感じ、時々そのあたり前の確かさに⑨ 圧倒される。

その日、いつものように、午後の時間を氷の見晴らし台の上で過ごしていた。そこは巨大な氷塊のてっぺんで、リードを見渡すことができ、はるか彼方からやってくるクジラをいち早く見つける場所だった。

マイラという村のお婆さんが一緒だった。海を見ながらとりとめの話をしていた。クジラの話はしない。今年はどう駄目だろうと、だれもが思っていたからだ。いくつかのキャンプはすでに引き払い、村に帰っていた。マイラの顔を見るのが辛かった。あんなにマクタク（クジラの表皮）を食べたがっていたのに。夕方になって、隣りのキャンプのクルーが走ってきた。

「ジョー・フランクリンのクルーがクジラを獲った！」

身体全体に震えるような興奮があつた。僕はどうしていいかわからなかった。クジラがウミアックに引かれて戻ってくる。写真を撮らなければ。僕はキャンプに向かって走っていた。伝令がキャンプ全体に伝わっていた。カメラを用意した僕は一目散に氷の見晴らし台に向かって走っていた。近づくにつれ、だれかの歌声が聞こえてきた。古いエスキモーの歌だった。見ると、だれもない氷の上で、老婆が海に向かって踊っている。ゆっくりとした動きで、何かに語りかけているように見える。マイラだ。きつと昔から伝わる

クジラに感謝する踊りなのだろう。近づくと、マイラは泣いていた。僕の存在などありはしないかのように踊り続けていた。^⑩自分は今、踊りの原点を見ているのだろうと思った。

心のフィルムにだけ残しておけばいい風景が時にはある。

クジラが氷原に横づけにされ、長いロープが掛けられ、ほとんど全員がこのロープの脇についた。掛け声とともに引き上げ作業が始まる。何か運動会の綱引きをしているような気分になってくる。引いても引いても自分の場所は同じ。クジラは動いていないのだ。途方もない仕事のように思われた。それでも、クジラは少しづつ氷の上にならず上がってきていた。作業が始まってから二時間後、クジラは黒い巨体をすっかり氷の上に横たえた。つい数時間前まで北極の海を泳いでいたクジラが目の前にいた。僕は手で触り、ペタペタと叩いたりして感触を確かめた。不思議な気持ちだった。

^⑪全員がクジラを取りかこむように集まり、クジラへの□の祈りが捧げられた。キリスト教との関わりだろう。キリスト教が入る前、エスキモーの社会はシャーマニズムの世界だった。その時代にはきつと違つた形での狩猟に対する信仰があったのだ。

^⑫クジラの表皮、マクタックの一部が切り取られ、すぐに女たちによってボイルされ、皆に配られる。熱くて、フーフー言いながら食べた。口の中でとろけるようなうまさ。自分でもびっくりするほど身体が熱くなってくるのがわかる。何だか、すごい食べ物だな。だれもが喜色満面だった。僕はマイラを捜していた。どんな顔で食べているのか見たかったのだ。マイラは、ジョー・フランクリンの若いクルーをつかまえて、抱きつくようにして彼らの粘り強さを讃えていた。若いクルーが迷惑そうに苦笑いしているのがおかしかった。どこもかしこも、笑いと熱気に包まれていた。

^⑬クジラの解体作業が始まった。このクジラを仕留めたクルーによって全ての解体が行われる。これが決まりだ。六月に村で行われるクジラの感謝祭の日取りも、クジラを仕留めたクルーのキャプテン、ジョー・フランクリンによって決められる。

解体が始まると、他のクルーはまわりから作業を助けた。女たちは食事を運びながら男たちの長い仕事を支える。一頭のクジラがどのように解体されてゆくのか、実に興味深い。切り裂いてゆくにしたがってクジラの身体の中から大量の湯気が立ち上り、氷の上は鮮血で真赤に染まっていった。クジラの上になり、黙々と作業を進める若いエスキモーたちに、時々年寄りが指示を与えている。いい風景だった。老人がどこかで力を持つ社会とは、健康な世界かもしれないと思つた。何よりも若者たちの顔が輝いていた。

一晩中かかった解体は終わりに近づいていた。だれもが疲れきっていた。肉はすべての村人に分け与えられ、最後に、巨大なあごの骨だけが氷上に残された。すると人々はそのあご骨のまわりに集まり、掛け声とともに海に向かって押し始めた。僕は、何をやるうとしているのかすぐにわからなかった。彼らはそのあご骨を海に返そうとしているのだ。乱水の彼方から昇り始めた太陽は、すでに氷上に物の影を作り出している。あご骨が氷から離れ、海に沈んだ。

「来年もまた戻ってこいよ。」

その瞬間、人々は海に向かって叫んでいた。エスキモーは、そのあご骨にクジラの靈魂を託していたのだ。長かったクジラ漁が、この時終わった。

〔星野道夫「アラスカ 風のような物語」より〕

※(注) 白夜——北極に近いところで、夏の夜、太陽の光の反射でうす明るくなること。

エスキモー——アラスカにすむ先住民族。

カリブー——トナカイのこと。

クルー——ウミアック（アザラシの皮で作ったボート）の乗組員。

シャーマニズム——シャーマン（霊媒師）を仲立ちにした霊的存在とのやりとりを中心とする宗教儀式。

霊魂——肉体の死後も存在すると考えられているたましい。

問一——線①「人間の営みが絵となる一瞬がある。」とありますが、「人間の営み」が「絵となる一瞬」の情景が具体的に描写されている部分を文中から過不足なくぬき出して、その初めと終わりの五字を答えなさい。

問二——線②「□に返る。」の□に漢字一字を入れて「正気をとりもどす」という意味になるように答えなさい。

問三——線③「クジラを見ている余裕などなかった。」とありますが、なぜですか。できるだけ文中の言葉を使って、解答らん「から」につながるように十五字以上二十字以内で答えなさい。

問四——線④「ウミアックで追う人間と、同じ生命の延長線上にクジラの生命があった。」とありますが、どういうことですか。次のア・エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア ウミアックで追う人間とクジラは、同じほにゆう類として仲間であること。

イ ウミアックで追う人間から進化してクジラという巨大な生命がたん生したこと。

ウ ウミアックで追う人間とクジラは、自然の中では同じ生命体として対等であること。

エ ウミアックで追う人間の祖先としてクジラの生命が存在しているということ。

問五——線⑤「なんてこの場にそぐわない歌をうたっているんだろう。」とありますが、「この場」とは、どのような場面をいっていますか。解答らん「場面」につながるように考えて十字以内で答えなさい。

問六——線⑥「この年のリードはずっと不安定だった。」について、次の1・2の問いに答えなさい。

1 「リード」のくわしい説明にあたる部分を文中から一文でぬき出し、その初めの六字を答えなさい。

2 「リード」は、クジラにとっては、何のために必要となるのですか。文中から漢字二字でぬき出して答えなさい。

問七——線⑦「『もしも一頭のクジラも獲れなかったら』という不安が村人たちの間に漂い始めていた。」とありますが、筆者は、エスキモーの人々にとって「クジラ漁」はどのような意味を持つものだと考えられていますか。文中から連続する二文をぬき出し、その初めの五字を答えなさい。

問八 —— 線⑧ 「僕は自然の秩序を感じ、時々そのあたり前の確かさに圧倒される。」とありますが、「僕」は何に圧倒されているのですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 自然の生き物は、自然界を支配するきまりのつとって生きていること。
- イ 自然の生き物は、連絡をとり合い、助けいし助け合って生きていること。
- ウ 自然の生き物は、自然のおきての中で生き、おきてを破れば死ぬこと。
- エ 自然の生き物は、人の力が及ばない神の命令に従って生きていること。

問九 —— 線⑨ 「その日」のさし示す内容を、文中から二十字以上二十五字以内でぬき出し、解答らんの「日」につながるように答えなさい。

問十 —— 線⑩ 「自分は今、踊りの原点を見ているのだろうと思った。」とありますが、「踊りの原点」とは、どういうことですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 踊りとは、もともとはこの老婆のように、断絶された孤独の中から生まれるものであること。
- イ 踊りとは、もともとはこの老婆のように、かなわないう願いをかなえるための動作であること。
- ウ 踊りとは、もともとはこの老婆のように、心の働きに従って体が自然に動き出すものであること。
- エ 踊りとは、もともとはこの老婆のように、先祖代々伝わった型を忠実に再現することであること。

問十一 —— 線⑪ 「全員がクジラを取りかこむように集まり、クジラへの□の祈りが捧げられた。」の□に最もよくあてはまる気持ちを表す言葉を文中からぬき出して答えなさい。

問十二 —— 線⑫ 「クジラの表皮、マクタックの一部が切り取られ、すぐに女たちによってボイルされ、皆に配られる。」とありますが、この時の「皆」の心情が最もよく表現されている言葉を文中から五字以内でぬき出して答えなさい。

問十三 —— 線⑬ 「クジラの解体作業が始まった。」とありますが、エスキモーが皆で力を合わせて行う「クジラの解体作業」を通して筆者が最も強く感じたことを文中から一文でぬき出し、初めの三字を答えなさい。

問十四 ――線⑭「彼らはそのあご骨を海に返そうとしているのだ。」とありますが、「彼ら」は何の目的で、クジラの「あご骨」を「海に返そう」としているかと筆者は考えましたか。次のア～エの中から最もよくあてはまるものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア クジラが生活していた広大なアラスカの海にあご骨を返すことで、クジラが二度と人間に獲られないように祈るため。

イ クジラがたましいが宿ったあご骨を海に返して、再び生まれ変わって恵みを与えてくれるよう祈りをこめるため。

ウ クジラはアラスカの大自然からいただいたものなので、あご骨を海に沈めて、クジラの死後の幸せを願うため。

エ エスキモーにとってクジラは海をつかさどる神の化身であり、そのあご骨を神にささげて一層の豊漁を願うため。

問十五 本文の内容として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 筆者は、アラスカのエスキモーのクジラ漁を通して、エスキモーの人々の自然に対する接し方や考え方を知り、感動を覚えている。

イ 筆者は、いまだに手作業で行われるアラスカのエスキモーたちのクジラ漁への情熱とこだわりにより現代人とのへだたりを感じている。

ウ 筆者は、アラスカの大自然に生きるエスキモーの人々の厳しい狩猟生活を体験し、これからもサポートを続けたいと思っている。

エ 筆者は、アラスカに生きるエスキモーの生活に、人類最後の理想を見て、アラスカの美しい自然を保護しようと決意している。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。①④は意味段落を表します。(字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。)

① あなたが得意なことは何ですか。それはどうやって学びましたか。学習科学者である三宅なほみさんと白水始みずはじさんはその著書『学習科学とテクノロジー』(放送大学教育振興会、二〇〇三年)の中で、学びの特徴をいくつかあげています。

たとえば英語、水泳、機械の修理など、そもそも得意だということは、他の人よりいろいろなことを知っていて、他の人よりうまくできる、その事柄ことごとについてはもつと奥おくがあつて、もつと学びたいと思つてい①る。すなわち得意だということは、学習が成功したということです。

自分が得意になるまでを振り返つてみると、得意になるまでにはずいぶん時間がかかっていること。いつかの時点で「得意になりたい」と意識的に思つたり、自覚的に学びたいと思つた出発点があることが多いです。自覚的に学び始めたころは、本を読んだり、ビデオを見たり、様々な情報収集をしたり。また、身近に一緒に学んでくれる友達や親切に教えてくれる先輩せんぱいがいたり、ぜひあの人のようになりたいという目標やモデルになる人がいたり。そして何より、自分自身で何度も考え、自分で試ためし、ときには他人の批判に耳を傾かたむけて自分のやり方を変えるなどして、けつこう時間とエネルギーがかかっているものです。

私は料理をするのが大好きです。人からも喜ばれるので、たぶん得意であるといつてもいいでしょう。さて、どうやって得意になったかを考えてみると、一番最初は小学校低学年の時でした。母親がいない間に、人参にんじんと大根を切つてなべに入れてゆで、お醤油しょうゆを加えたら、なんとなくお吸い物ができていることを「発見」したのでした。

大学生になってからは、さらにいろいろ作るようになり、そのころから合計してみれば、料理にはかなりの時間をかけています。おいしいものを食べた時、それがどうやったたら再現できるのかを考え実践じっせんし、また、レパートリーを増やすためテレビや新聞、雑誌などちょっとしたことにも目をトめて、みたりしています。料理本を買うこともあります。本もいろいろあるので、自分にじっくりとくる説明の仕方をしていゝるのを時間をかけて選びます。

料理人にコツを教えてもらうこともあります。②プロでなくても、これはいいなと思うときには必ず聞きまゝす。そしてそれを試してみます。失敗した時はもちろん、うまくいった時もなぜできたのかを考えます。また、ときには一〇名以上、家に友人を招待して、夜中まで料理をし続けることもあります。仕事の帰りにまわりにいる同僚どうりょうに声をかけて自宅さかに誘よそい、あり合わせのもので作ることもあります。これがチャレンジングで楽しいのです。

料理は創造的で、自分も楽しいし周囲にも喜ばれる技術。特に海外で、日本人にとっては「いつもの」料理を作ることは、大変珍めずらしがられ喜ばれます。どこの国でもお店に行けばそれなりに材料は手に入ります。男子でも女子でも、学んでおいてぜつたい損はありません！

さてここで、私の料理の経験からわかる「得意だ」すなわち「成功した学び」の特徴は、

- ・ 一定以上の時間をかける。
- ・ 自分から学びたいという強い動機づけを持つ。
- ・ 自分から積極的に関連情報を収集し、必要なことを覚える。
- ・ 教え合つたり、議論をしたりする仲間がいる。
- ・ 自分より少しできる人、相当できる人、プロ、様々なレベルの先輩がいる。

・自分で X 錯誤し、失敗や成功の経験を繰り返して、自分なりの知識を作り上げる。

・学んできた結果がさらに学びたいという意欲を引き起こし、次の学びに結びつく。

ということですが。ただ悲しいかな、すべてのことについてうまくはいかず、興味のある対象は、個人によって、限られたものであるということです。私にとつて、小学校中学校時代のピアノの練習は、苦痛以外のなものでもありませんでした。今となつては、あの時^③それを乗り越えてやつておけばよかつたと思いますが。新しい学習に関する研究成果を見てみると、成功した学習の特徴からわかることを、自分が苦手だと思つても活かしていく方法はありそうです。

② 私たちが日々の暮らしの中で、様々な体験を通して、いろいろなことを学んでいるとしたら、それはいつ、どうやつて学んでいるのでしょうか。

④ 学校以外のところでは、家の中や家の外で、親兄弟姉妹あるいは友人から、学んでいるのではないのでしょうか。何か必要になつたり、やりたくなくなつたりした時に、あまり意識せず、学んでいます。それではどうやって？ 見てまねたり、X 錯誤してやつてみたり、説明を聞いたり。それを学んだかどうか、結果を確かめるには、その場でやつてみたり、同じような状況^{じょうきやう}になつたときにやつてみたり。あるいは、できるようになつたと、他人に見せたり、披露^{ひろう}したりすることもあるでしょう。

教える側は、自分がやつてみせたり、説明したり、ちよつと頑張ればできそうな課題を与えたり、できそうなところまで手助けをすることもあるでしょう。あまり意識していなかつた、こんなところに学びのヒントは隠れています。うまくいった学びの方法を思い出し、他の場面にその方法を適用してみる。ふだんから「学び」について意識化することで、世界が違つて見えてくるはずですよ。

③ 今、日本の高校生や大学生のなかには、何のために勉強するのか

わからない、すぐに役に立たないのだったら、あるいは将来役に立ちそうにないのだから、無理に勉強することはない、という人たちが多くいます。

⑤ 渡辺華山の描いた江戸時代の寺子屋の絵をちよつと見てください。とても楽しそうに学んでいます。勉強しているというよりは、

遊んでいるようにも見えます。寺子屋は、江戸時代の庶民の子どもを対象とした初等教育機関です。現在の小学校の倍の数が存在したそうです。

⑥ ここでは、基本は自学自習です。一寸子花里の絵をみると、大先生のほかにもお手伝いをしている大人がいることがわかります。学ぶのは基本的に、読み、書き、そろばんです。個人に合わせたカリキュラムで、文学に興味のある子どもには※そういった教科書を、家の仕事で計算が必要な子どもにはそろばんを。同じ教室にいながらも異なる課題に勤しんでいます。

寺子屋にやつてくる時間もみんなバラバラ。それぞれ家の仕事の手伝いがあるので、それが一段落してからという子もいたようです。でもみんな学びたくてやつてく



一寸子花里「文学ばんだいの宝末の巻」(公文教育研究会所蔵)



渡辺華山「一掃百態図(部分) 寺子屋図」(田原市博物館所蔵)

る。文字が読めるようになる、いろいろな物語や算術の本を読むことができる。するとそこには、今まで知らなかった世界が広がっているのがわかる。そこには、学ぶ楽しさ、知る喜びのために学ぶということがあつたに違いありません。

4 現代において、寺子屋の時代のような、学ぶ楽しさを取り戻すことはできるのでしょうか。

やる気、意欲（英語ではモチベーション）のことを心理学用語では、「動機づけ」といいます。^⑦ 動機づけ研究では、内発的動機づけと、外発的動機づけがあるとされます。内発的動機づけとは、自らそのことを学びたいという好奇心や関心によって生まれる「やる気」「意欲」のことです。これに対し外発的動機づけとは、外側から動機づけられる、いわゆるアメとムチ、競争や賞罰^⑧によってもたらされる動機づけです。

双方を対比してみると、1の方が望ましく、長続きするように見えます。しかしそう単純ではありません。最初は2なものであっても、それがある程度できるようになってくると、それ自体に面白さを見出して、3なものに変わっていくこともしばしばあります。親から言われ、いやいややっていたピアノのお稽古^⑨も、ある程度上手になると、自ら進んで練習したくなる場合です。一方で、4にやっていたことに対し、ほめられたり、ごほうびをもらうことで、かえってやる気がそがれてしまうこともあるのです。そのためにやっているのではないのにと、自尊心が傷つけられ、やる気がうせる場合があります。

動機づけの研究はこれまで、動機づけを個人の問題としてみてきました。Aここで、さきほどの「得意なこと」の特徴、あるいは「生活の中での学び」に出てきたことを思い出してみましょう。そこには、まわりに仲間がいる。見せる相手がいる、ということも重要であることがわかります。B、人は一人で生きているのではなく、そこにはいろいろな人がいて、その環境^⑩がやる気にも関係しているということです。

仲間と一緒に学ぶ、仲間との活動の中で学ぶ、誰かの役に立とうとして学ぶなど、そこには共同的な活動、社会的な活動が深くかかわっているのです。^⑨ 学びの特徴として、こういった点に着目して、自分の学び方を変えてみるのもよいでしょう。

（美馬のゆり「理系女子的生き方のススメ」より）

※（注）カリキュラム——学習内容、教育内容の計画。

問一 ——線 a 「レパートリー」のここでの意味として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 自信をもって作れる料理
- イ 料理に使う食材
- ウ 料理のおいしい食べ方
- エ お気に入りの料理店

問二 ——線 b 「ト」と同じ漢字を使うものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 息をトめる。
- イ 心にトめる。
- ウ 時計をトめる。
- エ 仕事の手をトめる。

問三 —— 線① 「すなわち得意だということは、学習が成功したということです。」とありますが、ここで
の「得意」とはどういうことをいうのですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記
号を答えなさい。

- ア 根っからの才能にあふれていて、わざわざ学ぶ必要がないということ。
- イ 学ぶことで自信が付き、自分をほこらしく思うようになるということ。
- ウ 勉強の成果が出て、できない科目ができるようになるということ。
- エ 必要な知識を身につけていて、他の人よりうまくできるということ。

問四 —— 線② 「プロでなくても、これはいいなと思うときには必ず聞きます。」とありますが、これはい
いなと思うときには必ず何を聞くのですか。文中の言葉を使って、五字で答えなさい。

問五 文中の二カ所の X には、漢字二字の同じ言葉が入ります。考えて答えなさい。

問六 —— 線③ 「それ」とは何を指していますか。文中から一語でぬき出して答えなさい。

問七 —— 線④ 「学校以外のところでは、家の中や家の外で、親兄弟姉妹あるいは友人から、学んでいるの
ではないでしょうか。」とありますが、あなたが「家の中や家の外」で「親兄弟姉妹あるいは友人」か
ら「学ん」だことの具体例を一つ、筆者の考えに沿って考えて答えなさい。ただし誰から何を学んだの
かがわかるように答えてください。

問八 —— 線⑤ 「渡辺華山の描いた江戸時代の寺子屋の絵をちよつと見てください。とても楽しそうに学ん
でいます。勉強しているというよりは、遊んでいるようにも見えます。」とありますが、「渡辺華山の描
いた江戸時代の寺子屋の絵」が「とても楽しそうに学んでい」るように見える理由を、筆者はどのよう
に考えていますか。解答らん「のために学んでいたら」につながるように、文中から五字以上十字以
内でぬき出して答えなさい。

問九 —— 線⑥ 「ここでは、基本は自学自習です。」とありますが、なぜ寺子屋での学習の「基本」は「自
学自習」なのです。次のア～オの中から適当なものをすべて選び、その記号を答えなさい。

- ア 勉強を教えることのできる大人が、一人しかないから。
- イ 一人ひとりの学びたいことは、それぞれ異なるから。
- ウ 家の手伝いなどのため、やってくる時間が皆違うから。
- エ 皆で学ぶことのできる広い部屋が用意できないから。
- オ 幼い子どもは、皆で一緒に学ぶことが嫌いだから。

問十 ——線⑦「動機づけ研究では、内発的動機づけと、外発的動機づけがあるとされます。」とありますが、筆者の考える「内発的動機づけ」の例として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 合唱コンクールで一番になりたいので、練習をする。
- イ 作品の世界に入りこむことが楽しいので、小説を読む。
- ウ 先生に怒られるのが嫌なので、宿題を終わらせる。
- エ 親にほめられるのがうれしいので、家の掃除をする。

問十一 文中の□ 1～4には「内発的」「外発的」のどちらかの語が入ります。答えとなる組み合わせとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 1 外発的 2 内発的 3 外発的 4 外発的
- イ 1 外発的 2 内発的 3 外発的 4 内発的
- ウ 1 内発的 2 外発的 3 内発的 4 内発的
- エ 1 内発的 2 外発的 3 内発的 4 外発的

問十二 文中の□ A・Bにあてはまる言葉として最も適当なものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えなさい。

- ア そして イ つまり ウ なぜなら エ しかし

問十三 ——線⑧「『生活の中での学び』に出てきたこと」とありますが、「生活の中での学び」について詳しく述べられた意味段落を□ 1～4の中から一つ選び、その段落の番号を答えなさい。

問十四 ——線⑨「学びの特徴として、こういった点に着目して、自分の学び方を変えてみるのもよいでしょう。」とありますが、「こういう点」とはどのような点ですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア お互いに助け合いながら学ぶことが、仲間を作ることと深く関わっているという点。
- イ 共同的、社会的活動とは、仲間と共に学び、活動することを指すのだという点。
- ウ 誰かと一緒に活動したり、社会の発展のために学ぶことが、本当の学びであるという点。
- エ 仲間と一緒に学んだり、誰かの役に立とうとして学ぶことが、やる気につながるといふ点。

三 次の漢字と言葉に関する問いに答えなさい。

問一 次の①～④の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① ヤチンを支払う。
- ② コウテツの意志をつらぬく。
- ③ 本を読んでシヤを広げる。
- ④ キコウの変化を観測する。

問二 次の①～④の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① サービスに努める。
- ② つぎつぎに質問を浴びせる。
- ③ お社を建て直す。
- ④ 田畑に水を導く。

問三 次の①～③の□に、下の意味になるように体の一部を表す漢字一字を入れて慣用句を完成させなさい。

- ① □であしらう (冷たくあしらう様子)
- ② □車に乗る (うまい話にだまされる)
- ③ □を長くする (待ちわびる)

問四 次の①・②のことわざと似た意味で使われているものを、後のア～カの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えなさい。

- | | | | |
|---|--------------|---|--------------|
| ① | ぬかに <u>釘</u> | ② | 他山の石 |
| ア | となりの花は赤い | イ | 木に竹をつく |
| エ | 帯に短したすきに長し | オ | 人のふり見てわがふり直せ |
| | | カ | 知らぬがほとけ |

問五 次の①・②の文中の□にあてはまる適当な言葉を、後のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えなさい。

- ① 明日、□雨が降ったら、運動会は中止だ。
 - ② あのサッカーチームに、□負けるとは思わなかった。
- ア さぞ イ もし ウ たぶん エ まさか オ たいへん

問六 次の①・②の——線部について、適当な敬語に書き改めなさい。

- ① 文化祭のチケットについては、受付でうかがってください。
- ② 校長先生が、全校朝礼でお話をした。